

---

# 今日は絶対に負けられねえんだ

野鶴善明

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

今日は絶対に負けられねえんだ

### 【コード】

N9348N

### 【作者名】

野鶴善明

### 【あらすじ】

珠算七段の風変わりなボクサーの奮闘記。

いてっ。

なにしゃがるんだ、この野郎。

てめえ、いま嗤<sup>わら</sup>つただろ。俺にはよく見えるんだぜ。

お前さんよ、人を殴<sup>う</sup>つておいて嗤<sup>わら</sup>うなんざ、よくねえぜ。

まずは軽くジャブってところからいこうぜ。

挨拶がわりにさ。

そんな怖い顔して、俺を睨<sup>にら</sup>むなよ。

ジャブ、ジャブ、左フック、おっと危ねえ。

知ってるかい？

じつは俺、珠算七段なんだよ。

笑<sup>わら</sup>っちゃうだろ。プロボクサーが珠算七段だってよ。デヘヘ。ほんとだよ。俺は中学校の時、県の珠算大会で三位に入ったんだ。今でも賞状を持つてるぜ。ほんとうは、ボクシングよりも算盤のほうが得意なんだ。

それからついでに言<sup>い</sup>つとくけどよ、俺は簿記一級に税理士の資格も持つてるんだ。どうだ、すげえだろ。

みみっちい？　なんでだよ。

ああわかった。俺がファイトマネーの管理を自分でやってるって思<sup>おも</sup>ってるんだろ。アハハ。ばかだな。お前はほんとにばかだよ。ボクシング業界<sup>業界</sup>ってやつは世界チャンピオンにでもならねえかぎり、ボクシングだけで喰<sup>く</sup>っていけるもんじゃねえんだよ。お前さんだっ<sup>つ</sup>て知<sup>し</sup>ってるだろうに。俺は、コンビニと宅配便の配達とビル掃除のアルバイトで喰<sup>く</sup>ってるんだよ。管理しなくちゃいけねえような資産なんてねえよ。お前さんだっ<sup>つ</sup>て、なんかバイトをや<sup>や</sup>ってるんだろ。おたがいさまさ。

なに？

税理士のバイトでぼろ儲けしてるんだろっつてか？

時給はそこそいいけどさ、そんなもんは確定申告と決算の手伝いくらいしかねえんだよ。なにしろ俺はボクサーだ。面接に行っても「こいつほんとうに計算できるのかよ」って目で見られちまう。頭を殴られておかしくなってるんじゃないかって思われちまうんだよ。おまけに試合が入ったら準備をしなくちゃいけねえから、一年通して働くななんてむりだ。減量すりゃ、腹が減る。腹を空かせてたんじゃない、計算を間違えちまう。いくら珠算七段でも、腹ペコじゃ計算できねえしな。あんまり儲からないよ。

フェイント、左フック、右ストレート。

ちえっ。うまくよけやがったな。

お前さん、なかなかのもんだよ。デヘヘ。

さっさと經理の仕事でも見つけて引退しろっつてか？

お前さんの言うとおりかもしれねえ。ボクシングは儲からねえかな。算盤勘定はたしかに合わねえよ。けどよ、ボクシングでしかできねえことがあるんだ。お前さんにも、おいおい話してやるよ。

正直言つと、殴り合いは性に合わねえ。

第一ラウンドのゴングが鳴った時の一瞬はたしかに気持ちいいな。

みんなが俺を見てるって思うのは最高だね。快感さ。でも、俺は人に殴られるのが大嫌いなんだ。人を殴るのも、どうも気が進まねえ。俺がボクシングを始めたのは、ほかでもねえ、いじめられたからさ。俺は珠算が得意だった。なんでか知らねえけど、それが気に喰わないってやつがいて、俺は殴られ通しだったんだ。なんで珠算がうまかったら殴られなきゃいけねえんだ。わけがわからねえよ。でも、殴られたのは事実さ。

殴られねえようにするには、強くなるしかないよな。そこで俺はボクシングジムの門を叩いた。ご破算で願いましてはなんて言っただけ。算盤をぱちぱち弾いてた手にグローブをはめっただけ。

おやつさんとの出会いが俺を変えた。

そこでセコンドをやってくれてる禿頭のおやじよ。

殴られ通しで、根性の曲がりかけてた俺にやさしくしてくれたんだ。あのままだったら、俺はほんとうにグレてた。いや、グレルくらいだったらまだましだっただろうよ。自分で自分の首をくくっていたかも知れねえし、下手すりゃやけになつて人を殺していたかも知れねえ。

俺は物心がつく前にほんとうの親父が死んだから、親父の匂いつてやつに飢えてたんだな。俺はおやつさんに心酔した。おやつさんも俺を実の子供みてえにかわいがってくれた。上手になつて、おやつさんに認めてもらいたかった。算盤大会の賞状をもらうより、おやつさんに声をかけてもらうほうがよっぽどうれしかったね。おやつさんが、俺に人生のすべてを教えてくれたんだ。

やれやれ、やっとゴングが鳴ってくれたよ。

体も温まってきたし、一息入れようや。

じゃあな。

おいおい、お前さん、動きすぎだよ。

まだ第二ラウンドが始まったばかりかだぜ。そんなことをしてたら、ばてちまう。ぼちぼちやるうや。先は長いんだ。

なに？ 俺を見てるといらつくってか？

そうよ。その通りよ。

だから教えといただろ。俺は珠算七段で税理士だつて。計算高いのよ。いらいらさせて、あんたの体力を消耗させるのが狙いなのです。デヘヘ。それにしても、お前さんは単純だな。ここまでいらつく奴は見たことがねえよ。まあ、勝手にしな。

ジャブ、ジャブ、ジャブ、左フック、右アッパー。

くそつ、またはずれやがった。

おやつさんにはリング以外で人を殴っちゃいけないって何度も諭された。だけどよ、ここだけの話、おやつさんの許可を取って、一

度だけ人を殴ったことがあるんだ。

カツアゲされたことがあるかい？

ああそうかよ。

あんたは、カツアゲするほうだったんだな。お前さんもその口かそんな顔つきだよな。俺は一度もやったことがねえ。やりたいとすら思ったことがないね。そんなのは卑怯だからよ。

俺はボクシングジムへ通うようになってからも、いじめられ続けた。でもよ、俺はおやつさんの言いつけを守って一度も反撃しなかった。おやつさんが、素人をどつくなんてそんなのはボクサーじゃねえって口を酸っぱくして言うもんだからさ。

一年くらいたった頃かな、俺はとうとう耐え切れなくなって、親父さんに訴えた。

今までのことを全部おやつさんにぶちまけたんだ。

おやつさんは親身になって俺の話を聞いてくれたよ。そんな大人に出会ったことがなかったから、それだけでも大感激さ。子供だつて精一杯生きてるんだ。そんな簡単なことに気づかない大人があまりに多すぎるんだよ。

おやつさんは、俺を許してくれた。

素人を殴ることは、リングの神様に背くことだ。でも、おやつさんは、そんな俺を受け容れてくれたんだ。

俺は、カツアゲする奴らを思う存分ぶちのめしてやったぜ。

連中の顔つたら、ありやしなかった。いつもみてえにカツアゲしてくるからよ、挨拶代わりに一人のしてやったら、びびってやがんの。アハハハハハ。

その時、俺は悟ったね。

カツアゲする奴らなんて、ほんとは弱虫なんだ。人間じゃねえ、虫なんだよ。ゴキブリみてえにごそごそしてやがるだけなんだよ。カツアゲしてんのを見てみぬふりをする先公も弱虫だ。おまけに、<sup>センコー</sup>中学校のセンコーときたら、ちんぴらみてえな口を利きやがるしよ。

どこもかしこも、弱虫だらけだ。子供だって、大人だって、ちやちな弱虫が一人前の顔をして幅をきかせてるんだ。しょうもないよな。コロンプスの卵みてえな話よ。わかっちまえば、簡単なことかもしれねえけど、俺はわからなかった。アホだったんだ。

もちろん、人のことばかり言えねえ。

虫けらにいじめられていじめてた俺も虫だった。ろくでもないゴミ虫よ。でもよ、俺はあの時脱皮したんだ。虫のままじゃいけねえ、ちゃんとした人間にならなくちゃいけねえって心底思ったんだよ。リングの神様にかけてな。

それもこれも、おやつさんがチャンスを与えてくれたからさ。おやつさんが俺をカツアゲする連中を殴っていいって言ってくれなかつたら、たぶん、俺は今の今までそんなことに気づかなかつただろうな。真人間になろうとも思わなかつただろうよ。誰かを恨んで、ゆがんだ恨みを晴らすことしか考えなかつたかもしれねえ。いじけたまま一生を送るところだった。おやつさんにはいくら感謝しても、したりねえ。

おっと、そこまで。とまりなよ。

ゴングが鳴ったぜ。

ジャブ、ジャブ、ジャブ。

さっき聞いたか？

そうよ、休憩の間、ちびっ子たちが観客席から俺へ声援を贈ってくれただろ。ヒロ兄ちゃんってな。みんな声をそろえてよ。かわいい声だよ。

聞いてねえ？

しょうがねえ奴だな。お前さんは自分のことで手一杯だもんな。今日は二十人のちびっ子子どもを招待したんだ。

ちえっ、ばかにすんな。スポンサーにやっってもらったんじゃねえ。俺が身銭を切ってチケットをプレゼントしたんだよ。俺はバイト代を豚さんの貯金箱へ入れてこっこつ金を貯めたんだ。そうじゃなけ

りや、意味ねえじゃないか。

あいつら、みんなかわいそうな子供たちなんだ。親父にいじめられた、お袋にいじめられた、友達にいじめられた、先公にいじめられた、知らない人にいじめられた。みんな心に傷を負ってる子供たちさ。

あいつらは、うつむくことしか知らねえ。

いじめられて、すっかり萎縮させられてしまっているのさ。

ほんとは人間なのに、つまらねえ虫だって思いこまされてるんだ。だけだよ、それじゃいけねえ。

俺の闘ってる姿をあの子たちに見てもらいてえんだ。

虫けらだった俺でも、ちゃんと人間になれる。そこんことをちっちゃな眼まなこでしっかり見てほしいんだよ。なに、心配しなくても大丈夫だ。子供はなんでもわかるんだよ。

ジャブ、フエイント、左フック。

お前さん、今、顔をしかめただろ。

ちよっと当たったかな。やったぜ。デヘヘ。

俺は、勝ち負けなんてどうでもいいんだ。

格好つけて言ってるんじゃないぜ。

勝ち負けなんてただの結果さ。結果が出る時もあれば、そりゃ、出ねえ時もあるわな。肝心なのは、試合へ向けてどれだけ努力したかってことよ。結果なんて、糞みたいなもんだ。出るときゃ出る。出ないときゃ出ねえ。

だけだよ、今日ばかりは勝ちたいんだ。絶対、負けられねえ。

子供たちが観みてる。

あいつらが俺を観てるんだ。

下手なことはできねえ。

俺は、奴らの期待を背負っているんだよ。あいつらの声援をしょっているんだよ。自分だけのために戦ってるお前とは大違いさ。なに？

お前の気持ちなんてどうでもいい？

そりゃ、そうだ。

あんたの言うとおりだよ。アハハ。

人のことなんてどうでもいいことだよな。俺だって、ほんとうのことを言えば、自分のために闘っているのさ。

でもよ、俺はお前みたいな考え方が大嫌いなんだ。自分のことで手一杯の奴なんてクソだ。お前さんの足りない頭じゃわからねえかもしれないけどよ、人は誰でも、誰かのためになにかができるんだ。ジャブ、ジャブ、左フック、右ストレート。かわすなよ。

頼むからさ、当たったふりくらいしてくれよ。

子供たちが観てるんだぜ。エへへ。

第四ラウンドだな。

そろそろ、こつちも調子をあげていくぜ。うるさいな。

わかってるよ。

俺の調子はおしゃべりばかりだったか。

その通りよ。

俺は、ボクシングよりも客商売のほうが向いてるんだ。だから言っただろ。ボクシングは性に合わねえって。黙ってるのは嫌いなんだ。自分のバーでも持ったら、きつと繁盛するだろうよ。俺は客あしらいがうまいから、客がわんさかやってくるだろうな。俺は客相手におしゃべりして、がっぽり儲けさせてもらうよ。それになんと言っても、俺は算盤七段で簿記一級だ。税理士資格だって持っているんだぜ。帳簿だってきつちりつけられるし、節税のテクニクだってちよこつとは知ってる。小金くらいすぐにためられるさ。

そんなことはどうでもいいけどよ、ところで、お前さんはなんのためにボクシングをやってるんだ？ そこんとこを訊きたいね。なんだって？

チャンピオンベルトが欲しい？

ビッグになりたい？

勝手にしな。

くそつ。いてえな。

お前さんのストレートがすこし入っちまったよ。

あんたの人生だから、勝手にしなって言ったただけだろ。そんなにむきになるなよな。

俺はよ、さっきも言ったとおり、子供たちのために闘っているんだ。

俺が勝てば、ちびつこどもは希望が持てる。自分の手がなにかができるって思えるんだ。これは大事なことだぜ。

命は宝石みたいなもんよ。磨けば磨くほど輝くんだ。

でもよ、ふがいない大人たちのせいで、子供たちは自分は今もうなにもできないと思いきまされてる。大人の都合にふりまわされて、縛りつけられているんだ。悲しみのパンチドラッカーさ。自分じゃどうにもできねえ悲しみでちっちゃな心がどうにかなっちまったんだ。

そんなの黙って見てられるか？

俺は見ちゃいらねえ。

だから、その呪縛を解いてやるんだ。

いくぜ。

あんたをコーナーへ追いこんでやる。

右ストレート、右ストレート、左フック、右ストレート。

左フック、ジャブ、ジャブ、右アッパー。

フェイント、右ストレート。

デヘヘ。おもしれえな。デヘヘヘヘ。

ひっくり返っちまいやがった。のしてやったぜ。

どんなもんだい。

ほら、立てよ。

ビッグになりてえんだろ。

お前さんの夢は否定しねえぜ。

俺だって、世界チャンピオンになったら、舞い上がっちゃまうこと  
だろうよ。ちやほやされりゃ、そりゃ嬉しいよな。

ファイトマネーをがっぼりもらって、テレビCMに出演して二カ  
ツと笑うだけで大金が転がりこんでくるんだろうな。そうなりゃ、  
ちやちなアルバイトで食いつながなくてもいい。俺だって楽な生活  
をしてえよ。けどよ、そんなことが目標じゃ、力が湧かねえんだ。  
ジャブ、ジャブ、左フック。

お前さんよ、脇が甘くなってきたぜ。こんどこそ、ノックダウン  
させてやる。

右ストレート。左フェイント。右アッパー。  
こらっ。

俺に抱きつくな。

気持ち悪いじゃねえか。

あんたの体はやたらとねちねちするぜ。すげえ脂性だな。

長年ボクシングをやっても、これだけはどうしても慣れねえん  
だ。男同士で抱きつくなんて、気色悪いだろ。

あっち行けよ。

そんなにべたべたされたんじゃ、殴りたくても、殴れねえじゃな  
いか。

ほら、あっちへ行けっば。  
くそっ。

最高の気分になってきたっていうのに、ゴングが鳴りやがった。  
次のラウンドこそ、ぶちのめしてやる。

水が気持ちいい。

天井のライトがにじんでやがる。

俺はこの瞬間が好きなんだ。

生きてるって感じがするよな。

最高だね。

おやつさん、もっと水をかけてくれよ。

なにかのために闘うつてのは、気持ちいいもんだな。

ちびっ子どもが俺を呼んでるよ。

天使みてえにかわいい声だよな。

こんな俺でも、誰かのために闘えるんだ。

魔の第七ラウンドになっちまった。

俺はいつもここでやられちまうんだ。

なんでか知らねえけど、第七ラウンドとは相性が悪いんだ。

ラッキー・セブンなんて人は言うけどよ、俺にかぎっちゃ、逆なんだ。

えっ？

俺がへそ曲がりだからってか。

ほっといてくれよ。

自分の欠点を人に指摘されることほど、むかつくことはねえからな。

お前さん、まぶたが腫れてるぜ。デヘヘ。俺もそうだ。ふらふらになってきやがった。足がうまく動かねえ。そうなんだよ。足のスタミナが足りねえのが、俺の欠点なんだ。

ジャブ、ジャブ、ジャブ。

嫌な感じになつてきやがったな。

おい、やめてくれよ。

そんなに殴らなくてもいいだろうよ。

危ねえな。そんなに殴られたら、頭がどうかしちまうぜ。算盤が弾けなくなるだろ。せつかく暗記した税務知識がどつかへいつちまうじゃねえか。資格試験はけっこう面倒なんだぜ。

うっ。

倒れちまった。

倒されちまった。

おいおい。

おやつさん。なにするんだよ。やめてくれよ。  
だから、やめろってば。

タオルなんか入れてどうするんだよ。

子供たちが観てる。

今日ばかりは負けられねえんだ。

わかったよ。

立ちやいいんだろ。立つからさ。

いてえなあ。なんだか体中の骨が砕かれたみたいだぜ。

ふう。よっこいしょ。

ほら、なんとか立ち上がったぜ。ほんとに、タオルなんてやめてくれよな。洒落にならねえよ。

お前さんの姿が二重に見えるぜ。あんたもつらそうだな。おたがいさまさ。デヘヘ。

世の中なんて、くそつたれよ。

なんで世の中がくそつたれなんだっていったら、そもそも人間がふがいねえからなのさ。やさしさを出し惜しみするくせに、人から平気でいるんなものを奪いやがる。人間なんて、ろくなものじゃねえんだよ。

どこもかしこも罪だらけだ。

罪ってなんだ？

罪は愛を裏切ることだよ。

俺は愛を裏切りたくねえ。

愛を守るためだったら、地獄へ落ちててもかまわねえ。

だから、最後まで闘うんだ。

俺が勝つところを子供たちに観てもらうんだ。

リングの神様よ。頼む。今日ばかりは俺を勝たしてくれ。俺に力を与えてくれよな。

右アッパー、左フェイント、ジャブ、ジャブ、右ストレート……。

了

(後書き)

ウラジミール・ヴィソーツキイの  
た。

』に着想を得まし

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9348n/>

---

今日は絶対に負けられねえんだ

2010年10月8日12時12分発行